

# 『ブライズデール・ロマンス』と『ボストンの人々』の比較研究

岡 崎 薫

(人文学部英文研究室)

## On *The Blithedale Romance* and *The Bostonians*

Kaoru Okazaki

(Department of English, School of Humanities)

N. Hawthorne と H. James の作品のうちで、最も比較して論じられているのは、*The Blithedale Romance* (1852) と *The Bostonians* (1886) の二作品である。<sup>(1)</sup> 以下の本論において、この二作品についての比較・検討が試みられる。

### 1

Babiiha によれば、ホーソンとジェイムズとの関係についての議論は T. S. Eliot あたりから開始された。“It is with T.S.Eliot… that extended considerations of the James-Hawthorne relation begin.”<sup>(2)</sup> エリオットは、ジェイムズをホーソンの「継続者」(“a continuator”<sup>(3)</sup>) と見なし、二作家に共通するテーマは the “deeper psychology”<sup>(4)</sup> であると指摘している。さらに、これら二作家の作品の核心を次のように考察している。

The point is Hawthorne was acutely sensitive to the situation; that he did grasp character through the relation of two or more persons to each other; and this is what no one else, except James, has done.<sup>(5)</sup>

対人関係のある状況下における人物の心の奥底の表現が、二作家に共通する特徴であると指摘しているのであるが、さらに重要な問題点を含んでいるのは以下の指摘である。

[James] had taken talents similar to Hawthorne's and made them yield far greater returns than poor Hawthorne could harvest from his granite soil…<sup>(6)</sup>

このようなエリオットの考え方——ホーソンを土台にして、ジェイムズはさらに豊かな文学世界を構築してゆく——は、以後の様々な批評家たちの見解に、ホーソン・ジェイムズ研究における一大前提として、多大な影響を与え続けることになる。

F.O.Matthiessen も、この二作家の関係については、基本的にエリオットの説と同じである。マシーセンによれば、小説技巧家のジェイムズは、ホーソンの作家としての技巧の限界 (“Hawthorne's limitations”<sup>(7)</sup>) を知ることによって、自らの小説芸術の世界を創造してゆく手がかりとした。

His sense of the inadequacy of Hawthorne's loosely finished sketches could again have furnished the stimulus for his reiterated imperative to himself, 'Dramatize, dramatize.'<sup>(8)</sup>

このようにしてエリオットとマシーセンのジェイムズ・ホーソンに関する解釈は、以後のこの分野における批評動向を決定づけたと言っても過言ではなからう。

はじめに触れた二作品に関する比較研究において、第一に検討しなければならないのは M. Bewley の批評である。ビューリーは、"James had the advantage of all Hawthorne had already done—and not done."<sup>(9)</sup>と述べて、エリオットとマシーセンの考え方と同じ解釈をしている。そしてビューリーの議論の核心は、ホーソンとジェイムズの人物創造に関しての作家としての力量の差に着目している点である。『ボストンの人々』に登場する「人物」たちについて、彼らは、"the sharply defined and clearly lighted characters"<sup>(10)</sup>であると指摘して、ホーソンの「人物」たちよりも良く描かれていると考えるのである。

マシーセンによれば、この「人物創造」能力の欠如が、ホーソンの作家としての技巧の限界であり、ホーソンにより描かれたものは"states of mind"であって、"characters"ではないのである。<sup>(11)</sup>このようにして、ジェイムズの技巧家としての優位性の議論は、ホーソンの「ロマンス」作品の不備な短所と、ジェイムズの「リアリズム」小説の優位性という二項対立の図式の議論に発展してゆく。そして P. Buitenhuis の解釈はこの点を明確に示している。

…the romance elements that dominate Hawthorne's fiction and that James himself had drawn on for some early tales… were almost totally abandoned in *The Bostonians* in favour of a sharp realism.<sup>(12)</sup>

In this respect, *The Bostonians* began where *The Blithedale Romance* left off.<sup>(13)</sup>

これは、エリオット、マシーセンそしてビューリーの解釈と基本的に同じものである。

二作品の比較研究におけるビューリーの説を踏まえて、R. E. Long は、さらに分析を進める。ロングによると、『ボストンの人々』は、ジェイムズの "most elaborate restatement of Hawthorne's themes"<sup>(14)</sup>なのである。果たして、このような結論は妥当なものであろうか。この点を、本論において検討してみたいのである。

本論に入る前に、ロングの批評をさらに考察してみなければならない。ロングによると、『ブライズデール・ロマンス』は、"moral abstraction"<sup>(15)</sup>が物語の内容の中心となる「ロマンス」であり、『ボストンの人々』は、"concrete in its handling of human relationship"<sup>(16)</sup>が特徴である「リアリズム」小説である。(ロングは、ジェイムズのこの小説を "a fully realized novel of manners"<sup>(17)</sup>と言っている。)このような解釈の背景には、ホーソンの小説技巧は、ジェイムズのそれより劣っていて、「ロマンス」は「リアリズム」小説より低次元の作品であると見なす考え方が潜んでいるように思える。このようにして「ロマンス」と「リアリズム」小説を区別して考える見解については、ジェイムズ自身が "The Art of Fiction" の中で否定的にとらえている点であることを再認識しておかねばならない。

[An old-fashioned distinction between the novel of character and the novel of incident] appears to me as little to the point as the equally celebrated distinction between

the novel and the romance…<sup>(18)</sup>

また最近の研究においても、E.Greenwaldは、“For James, reality was best known through romance…<sup>(19)</sup>”と指摘して、ジェイムズの「リアリズム」小説と一般に考えられている作品の中の「ロマンス」的な要素を、むしろ肯定的に解釈しようと試みているのである。

以下の本論においては、ホーソンとジェイムズの二作品を次の手順——(1)Coverdaleの語りの世界の検討、(2)二人のヒロイン、ZenobiaとVerenaについての人物描写の検討——によって、分析し比較して論じることとする。

## 2

ジェイムズとホーソンに関して、L.Auchinclossは次のように指摘している。

The subtlety of Hawthorne's technique was never fully appreciated by Henry James although the latter professed to admire him. James found him a good deal simpler as a technician than we find him today.<sup>(20)</sup>

技巧家としてのホーソンを評価しようとしているのであり、確かに、『ブライズデール・ロマンス』は「へぼ詩人」(“the Minor Poet”<sup>(21)</sup>)である一人称の語り手カヴァデールによって「巧み」に構築された一つの独特な世界である。この「独特さ」とは何か、検討しなければならない。

この物語を読む時、読者はいくつかの謎に直面して当惑してしまう。読者が感じる最大の当惑のうちの一つは、最後の章となるカヴァデールの唐突な告白のくだりである。彼は次のように告白している。“I—I myself—was in love—with—Priscilla!” (p.228) このような彼のプリシラに対する気持は、真実の思いなのだろうか。彼の告白が、あまりにも唐突すぎるので、読者はすぐには信じられないのである。カヴァデールにとって、このか弱い娘プリシラは、一体どういう存在であったのだろうか。この点を検討してみなければならない。

カヴァデールが彼女に感じているものは、「愛」とか「恋」とかいう感情ではなくて、一人のあわれな娘に対する「哀しさ」である。この点は次の文章を引用すれば明らかとなろう。“Her simple, careless, childish flow of spirits often made me sad.” (p.69) さらに彼は彼女の“peculiar charm” (p.68)を感じていることは確かであるが、彼が秘そかに興味をいだいている女性は別に存在しているのである。その女性とは、他でもないゼノビアである。

プリシラに対するカヴァデールの本当の関係は、彼自身の次の言葉により明らかになる。

“…if any mortal really cares for her, it is myself, and not even I, for her realities—poor little seamstress… but for the fancy-work with which I have idly decked her out!” (p.94)

彼が彼女に見ているものは、彼女の「実像」ではなくて、明らかに、「美しく飾りたてられた虚像」なのである。そしてこの物語の最後の場面の告白において、カヴァデールがプリシラを「愛していた」と言うこの言葉は、「実像」と「虚像」を混同してしまっている彼自身の本当の姿を暴露しているのである。

一体何故にカヴァデールの思考は混乱してしまうのであろうか。この点に関して、彼自身、次の

ように述べている。

It is not, I apprehend, a healthy kind of mental occupation, to devote ourselves too exclusively to the study of individual men and women. (p.64)

このような自分の正常とは思えないような行為を、彼は“diseased action of the heart” (p.64) であると考え、自分の姿のこのような一面を、“the aspect of a monster” (p.64) だと思うのである。そして、他人の心の奥底をあれこれと興味本位でのぞき見ることにより、一つの異常な状況—“a great wrong” (p.64) —が出現するのである。この物語の最後の場面で、カヴァデールが、ユートピアの楽園となるはずであった野心的な企て—Blithedale—のことを、“this whole chaos of human struggle” (p.227) と言う時、彼自身もまたその「混乱」のただ中に生きていたことを、読者は知るのである。

現実世界と「ロマンス」の関係について、ホーソーンがカヴァデールに、“But real life never arranges itself exactly like a romance.” (p.97) と言わせているのであるが、もしもこの現実世界が彼が言っているとうり“chaos”に満ちているとするならば、「ロマンス」の世界も、現実世界からある一定の距離を保ってはいるものの、その“chaos”と無縁であるわけにはいかない。*The House of the Seven Gables* (1851) の「序文」において、ホーソーンは、「ロマンス」の目標は、“the truth of the human heart”を描写することだと言っているが、彼が描写しようとした人間はもともと現実世界に住んでいたわけであるから。

このようにしてホーソーンは、カヴァデールの語りをとらえて、一つの独特な“chaos”の世界をこの物語によって、Auchinclossの指摘にもあるように「巧みに」構築したのであった。

### 3

『ブライズデール・ロマンス』が一つの物語として“chaos”の世界を反映しているとするならば、この“chaos”の犠牲者となるヒロインが、いうまでもなくゼノビアである。“chaos”の世界における対人関係のエゴイズムの戦いに敗れて命さえ落としてしまう彼女について、ジェームズは次のようにホーソーンの人物描写を評価している。

Zenobia is... his only very definite attempt at the representation of a character...  
...it has a greater reality.<sup>(2)</sup>

またP.Rahvをはじめとして多くの批評家が、ゼノビアについては、ジェームズと同様な見方をしている。ラーヴはホーソーンがこの物語において創造したカヴァデールとゼノビアの人物像を評価して、“bold and free characterization”<sup>(2)</sup>であると指摘する。ゼノビアの人物像についてのこの形容語“bold and free”で、およそゼノビアの人物像については語り尽くせるように思えるのであるが、ここではゼノビアは一体何故に自殺しなければならなかったのか、という問題を考えながら彼女の人物像を検討したい。

ゼノビアの入水自殺に関しては、この物語の第18章の前半部分を読めば、その理由は明らかに示されている。つまり、直接の理由としては、ゼノビアとプリシラ、そして“the self-concentrated Philanthropist” (p.2) であるホリングスワスの三角関係における絶望的な状況が考えられる。この点は容易に読み取れるのであるが、問題はホーソーンが、彼女が陥った苦況に直面しそれを持ち

越えて生き抜くことを、彼女に許さなかった点である。

ホーソーンは、ゼノビアについて、この物語の序文において、彼女は“high-spirited”な女性であると述べている。さらにカヴァデールの言葉によって彼女の人間性の特徴を説明するならば、“the pride and pomp, which had a luxuriant growth in Zenobia’s character” (p.15) ということになる。カヴァデールが言っているように、ゼノビアはこの物語においては最初からすでに一人の成熟の域に達した美しい女性として、読者の前に登場して、そして「美しい一輪の花が枯れてゆく」ように姿を消してゆくのである。

…she had always a new flower in her hair. (p.41)

Nature had evidently created this floral gem, in a happy exuberance, for the one purpose of worthily adorning Zenobia’s head. …this favorite ornament was actually a subtle expression of Zenobia’s character. (p.42)

一人の人間の精神的な「成長」という観点からすると、すでに成熟した美しい女性として物語に姿を見せ、その姿のまま自らの意志で死を選択してしまうのである。そして、E.M.Forsterの言葉をかりて言えば、このようなゼノビアに関するホーソーンの人物描写の仕方は、“flat character”の登場人物を造型する仕方である。“[Flat characters] are constructed round a single idea or quality…”<sup>(24)</sup>とフォスターは説明している。また、“flat character”については、“not to be watched for development”<sup>(25)</sup>、つまり一人の人間として、精神的な発展・成長をとうしての人間(人格)形成の描写という問題とは無縁の「キャラクター」ということになる。しかしながら、ある固定的な観念を基にして構築される点が一つの特徴であると言われている「ロマンス」の世界の中の人物としては、ゼノビア=“flat character”の図式は当然のことなのかもしれない。

フォスターによれば、“no human being is simple”<sup>(26)</sup>であり、小説の中において“wonderful feeling of human depth”<sup>(27)</sup>を描写しようとすれば、“flat character”を用いる人物描写では不十分ということになる。こういう理由によって、“flat character”とは反対の意味を持つ“round character”の概念が想定されているのである。

そしてジェームズの『ボストンの人々』に登場するヒロイン、ヴェリーナは、まさにこの“round character”の概念を基にして描写されたと考えられるのである。以下、ヴェリーナ=“round character”の図式を検討する。

#### 4

ヴェリーナ・タラント (Tarrant) は、明らかに一人の人間として精神的に成長してゆく。その成長の過程は、この物語の中において明確に確認することができるのである。ホーソーンのゼノビアとはちがって、ジェームズのヴェリーナの内面世界は発展してゆくのである。彼女はゼノビアとはちがい、現実世界の生活を生き抜いてゆく道を自らの意志で選択するのである。

この物語の最初に登場した時点においては、彼女はニュー・イングランド地方の片田舎出身の世情には無知であり無邪気な娘としてその姿を表わす。そして南部出身の青年弁護士バジル・ランサム (Basil Ransom) に出会い、だんだんと彼を恋するようになってゆく。こうして人を恋し、また様々な「経験」をつむことによって一人前の女性へと成長してゆくのである。ジェームズによると、彼女のこの内面的な変化は“a cataclysm”<sup>(28)</sup> (「大激変」) である。ここでヴェリーナ・タ

ラントの一女性としての精神的な成長の軌跡を検討しなければならない。

この物語におけるヴェリーナの人間関係は、ゼノビアのそれと似ている。彼女が置かれる状況は、一種の三角関係である。つまりこの関係は、ヴェリーナをめぐる女権拡張論者オリヴ・チャンセラー (Olive Chancellor) とオリヴのいとこである保守主義者ランサムとの激しい獲得合戦である。物語の後半までオリヴは、ヴェリーナを表面上はしっかりと自分の保護下に置いて、二人が協力し合って女権拡張運動の道を進んで行くのである。しかしランサムの非常に積極的なアプローチにより、ヴェリーナの心は多に動揺し、そして最後はついに彼女は彼と二人だけの新しい生活へと旅立って行く決心をするのである。このようなヴェリーナ・タラントの“cataclysm”という大事件を用意周到に設定することによって、ジェイムズは“round character”としての彼女の姿を読者の眼前に提示するのである。

ヴェリーナのこのような心境の変化を、“the revolution… was taking place in her” (p.333) とジェイムズは説明する。“cataclysm”も“revolution”もヴェリーナの成長の面における大変な変化を意味しているのであり、テキストに即してさらに分析すると、彼女のこの心境の変化は“innocence” (p.73) から“the development” (p.324) への変化であり、彼女の一人の人間としての精神的な成長を示しているのである。この点を小説全体のテーマの関点から考えると、この物語は「主人公の精神発達乃至人間形成を主題とする」<sup>(20)</sup> 教養小説(ビルドゥングスroman)の様相を呈してくるように思える。

ヴェリーナは、“as innocent as she was lovely” (p.54) な娘として登場して、この時点における彼女の特徴は次のジェイムズの言葉で明示されている。ヴェリーナ・タラントは“submissive and unworldly” (p.61) な娘であり“an air of artless… purity” (p.46) を持つ。さらにジェイムズは「無邪気で素朴な」彼女を、くり返しくり返し次のような形容語——“very simple” (p.66), “very simple” (p.68), “so simple” (p.70), “simple” (p.73), “innocent” (p.96), “so poor in experience” (p.101), “the consummate innocence” (p.106), “so simple” (p.114), “only pure” (p.114) ——を用いて描写しているのである。

ところがこのように「無邪気で純粋な」彼女が、ランサムをしだいに恋するようになって変化してゆく。

[Vrena] expanded, developed, on the most liberal scale…

Verena's former attitude had been girlish submission, grateful, curious sympathy.  
(p.146)

このようにして内面的に成長してゆく彼女の姿を描写する時、ジェイムズが用いる形容語は以前とはまったく対照的な“developed”という語であり、その言葉がくり返し使用されている——“developed and matured” (p.193), “developed greatly since then” (p.220), “developed” (p.228), “the development” (p.324) ——のである。確かにヴェリーナ・タラントは変化してゆくのであるが、一体彼女のどの点が変わったというのか。

オリヴの意向にそって、最初ヴェリーナは、ランサムとの恋をあきらめようとしていたことは確かであったが、一人前の女性への変貌はすでにはじまっていたのである。彼女の本心をオリヴに見抜かれまいとして苦悩することにより「うそも方便」という現実世界の大人にとっての常套手段をだんだんと彼女は身につけていったのである。この点についてヴェリーナ自身次のように発言している。“I am learning to dissimulate… I pretend not to notice…” (p.249) 今や彼女は、これまでの“artless”な一人の無邪気で素朴な田舎娘ではない。若い女性にとり、恋はこれほどま

でに力を持っているものなのか。

She loved, she was in love — she felt it in every throb of her being. … a magical touch that could bring about such a cataclysm. (p.332)

このようにして、オリーフはヴェリーナの「心変わり」によって二度と立ちあがれないほど大打撃を受けるのである。しかしながらこの時のヴェリーナの顔の表情を、ジェイムズが、“a face like a lacerated angel’s” (p.352) と書く時、ホーソーンのゼノビアの最後の死のイメージ“the marble image of a death-agony” (p.216) とはちがいが、ヴェリーナ・タラントの一女性としてののさやかな生き方へのジェイムズの共感が込められているように思えるのである。

## 5

フォスターが、物語における人物描写の方法について、“…flat people are not in themselves as big achievements as round ones…”<sup>(30)</sup> と言う時、“flat character”としてのゼノビアを造型したホーソーンの作家としての力量は、“round character”としてのヴェリーナを造型したジェイムズのそれより劣っているようにも思えるのであるが、この点だけから二作家の力量を比較して、その優劣をつけるのは早計であろう。何故ならばゼノビアはホーソーンの主張する「ロマンス」の世界に生きていたのであり、一方ヴェリーナは、読み方によっては一種の「教養小説」ともなる世界に生きていたのであり、ある固定的観念を基にして造型されたゼノビアと、流動的な人生を生きるヴェリーナを比較してせいぜい言えることは、「静」と「動」の対照的なちがいがあるのみであるからだ。

ホーソーンが『ブライズデール・ロマンス』において、カヴァデールの語りをとうして現実世界の“chaos”の相を「ロマンス」の世界へと導入することによって読者をも混乱させる時、この読者の側の混乱を、作者の側の力量不足と混同して解釈してはいけないのである。何故ならば、『ブライズデール・ロマンス』の“chaos”とは、作者ホーソーンによって「ロマンス」という独特な世界を構築しようとする意図のもとに「巧みに」創り出されたものなのだから。

## <注>

- (1) T.K.Babiiha: *The James-Hawthorne Relation* (G.K.Hall and Company, 1980), pp.169-170 参照のこと。
- (2) *Ibid.*, p.52.
- (3) T.S.Eliot: “On Henry James” (1918) in *The Question of Henry James* (Octagon Books, 1973), p.112.
- (4) *Ibid.*, p.115.
- (5) *Ibid.*, p.116.
- (6) *Ibid.*, p.118.
- (7) F.O.Matthiessen: *American Renaissance* (Oxford University Press, 1972), p.298.
- (8) *Ibid.*, p.301.
- (9) M.Bewley: *The Complex Fate* (Gordian Press, 1967), p.15.
- (10) *Ibid.*, p.15.

- (11) Matthiessen, *op. cit.*, p.358 参照。
- (12) P.Buitenhuis: *The Grasping Imagination* (University of Toronto Press, 1970), p.141.
- (13) *Ibid.*, p.158.
- (14) R.E.Long: *The Great Succession* (University of Pittsburgh Press, 1979), p.162.
- (15) *Ibid.*, p.138.
- (16) *Ibid.*, p.138.
- (17) *Ibid.*, p.155.
- (18) Henry James: "The Art of Fiction" (1884) in *The House of Fiction* (Rupert Hart-Davis, 1957), p.34.
- (19) E.Greenwald: *Realism and the Romance* (UMI Research Press, 1989), p.159.
- (20) L.Auchincloss: "The Blithedale Romance: A Study of Form and Point of View" in *The Blithedale Romance* (W.W. Norton & Company, 1978), p.393.
- (21) N.Hawthorne: *The Blithedale Romance* (W.W.Norton & Company, 1978), p.3. 『ブライズデール・ロマンス』からの引用はすべてこの版による。以下の引用文の後の数字はページ数を示す。
- (22) H.James: *Hawthorne* (Macmillan, 1967), p.84.
- (23) P.Rahv: "The Dark Lady of Salem" in *The Blithedale Romance* (1978), p.340.
- (24) E.M.Forster: *Aspects of the Novel* (Penguin Books, 1970), p.75.
- (25) *Ibid.*, p.76.
- (26) *Ibid.*, p.78.
- (27) *Ibid.*, p.79.
- (28) H.James: *The Bostonians* (Penguin Books, 1971), P.332. 『ボストンの人々』からの引用はすべてこの版による。以下の引用文の後の数字はページ数を示す。
- (29) 川本静子, 『イギリス教養小説の系譜』(研究社, 1973), p.8.
- (30) Forster, *op.cit.*, p.80.

(平成3年9月30日受理)

(平成3年12月27日発行)